

2009年(平成21年)10月14日

月

新

島

渡

潮鳴

「郷愁」という  
三好達治の詩に  
こんな一節があ  
る。

海よ、僕

らの使ふ文字では、お前  
の中に母があるく▼4歳  
で母親をなくし、神戸か  
ら鳴門の本家に引き取ら  
れた社会運動家の賀川豊  
彦(1888〜1960  
年)は、子どものころ、  
よく鳴門や小松島の海に  
潜って遊んだ。海の中の  
母を求めて、というわけ  
ではないだろうが、そう  
することで孤独が癒やさ  
れたという▼賀川豊彦献  
身100年記念事業の一  
環として、あわぎんホー  
ルで開かれたフォーラム  
で、鳴門市出身の濱田陽  
・帝京大学准教授(宗教  
学)が「海 of 自然と賀川  
豊彦」と題して話した。  
濱田さんによると、賀川  
にとって「海に潜ること  
とは心の世界に沈潜するこ  
とになっていた」▼そして、  
多様な生き物がすむ自然  
の中に「協同」を見、生  
活協同組合や労働組合な  
どのビジョンを構想して  
いったのだという。さま  
ざまな波の形を観察し、  
ノートに記録しているの  
は、賀川がいかにも自然か  
ら多くを学んだかの証し  
だろう▼吉野川の自然が  
賀川の感性をはぐくんた  
話はよく聞くが、海と思  
想形成の関係については  
初めてだ。それだけに新  
鮮な感銘を受けた▼濱田  
さんによると、賀川は太  
平洋が「戦争の海」にな  
ることを憂えていたとい  
う。そづした平和への思  
いもまた、子どもどころ  
に遊んだ美しい鳴門の海  
ではぐくまれたようだ。